大吉備津彦命墓採集の遺物について

陵墓調査室

はじめに

大吉備津彦命墓は、現在の岡山県岡山市尾上・吉備津の地境が走る吉備中山の標高145m前後に位置する前方後円墳である。本墓は明治７年に、当時の備前国津高郡尾上村備中国賀陽郡宮内村境界字茶臼山の地に治定された。遺跡名は中山茶臼山古墳である（第１図）。

本墓については、平成20年度に新たな測量図を作成して、本誌第61号に報告したところである。墳丘に関する内容についてはそちらを参照されたい。本報告は、その時に報告できなかった採集遺物について紹介するものであり、本墓に関する調査報告の遺物篇に相当する。

さて、本墓の遺物であるが、現在のところ出土遺物として扱えるものはない。昭和55年に鳥居改築等の工事に伴い立会調査を実施したが、墳丘から離れた場所でもあったため、本墓に直接伴うような遺物はなかった(1)。よって、本号において報告する遺物はすべて表面採集資料である。古くは諸陵寮時代に収蔵されたものとして、埴輪片８点があるが(2)、それ以後も幾度かの機会に採集されることがあったようであり、現在は当庁以外にも幾つかの所蔵先が知られている(3)。

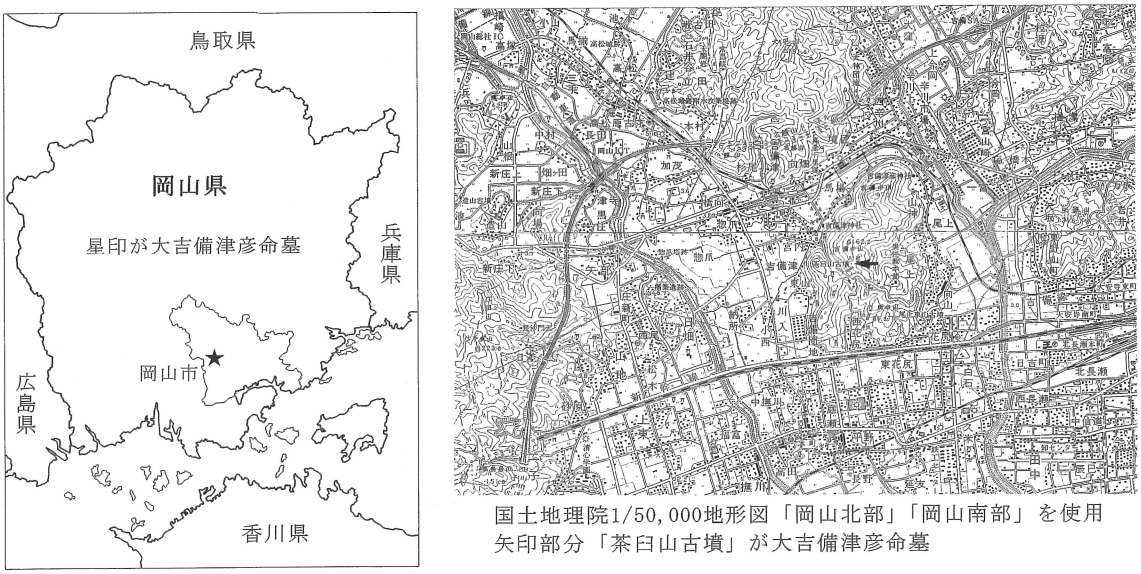
これらのうち、本報告では当部所蔵資料を中心に、岡山県古代吉備文化財センター所蔵資料についても調査の機会をいただいたので、主なものについて併せて報告したい。また、当部には、本墓とは足守川を挟んで西側の丘陵上にある矢部大坑古墳から、諸陵寮時代に採集された埴輪が３点所蔵されている。この機会に参考として、これらの資料についても報告を行いたい。

なお、本報告作成にあたっては、岡山県古代吉備文化財センターに所蔵されている「伝中山茶臼山古墳埴輪」の調査で、江見正己、宇垣匡雅、和田剛、小林利晴の各氏にご高配を賜った。また、当部所蔵の埴輪に含まれる砂礫種の観察所見は、後掲のとおり奥田尚氏に報告いただいた。記して感謝申し上げたい。

１　墳丘の概要と遺物の採集位置

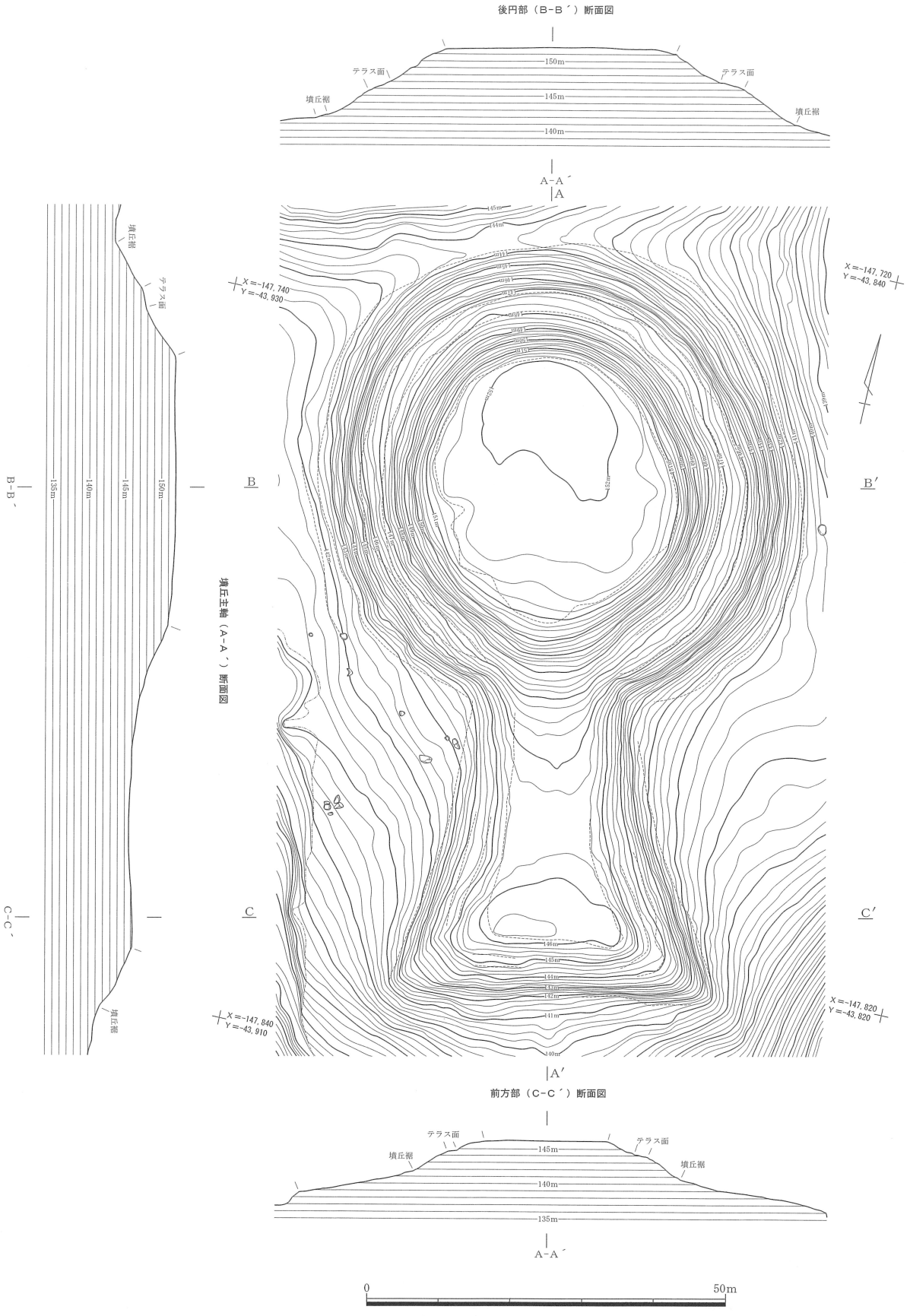
（１）墳丘の概要

詳細は本誌第61号に譲るとして、ここでは墳丘に関して簡単に述べておきたい（第２図）。



国土地理院1/50,000地形図「岡山北部」「岡山南部」を使用
矢印部分「茶臼山古墳」が大吉備津彦命墓

第１図　大吉備津彦命墓　位置図（左：縮尺不同　右：1/100,000）



第２図　大吉備津彦命墓　墳丘測量図（1/800）

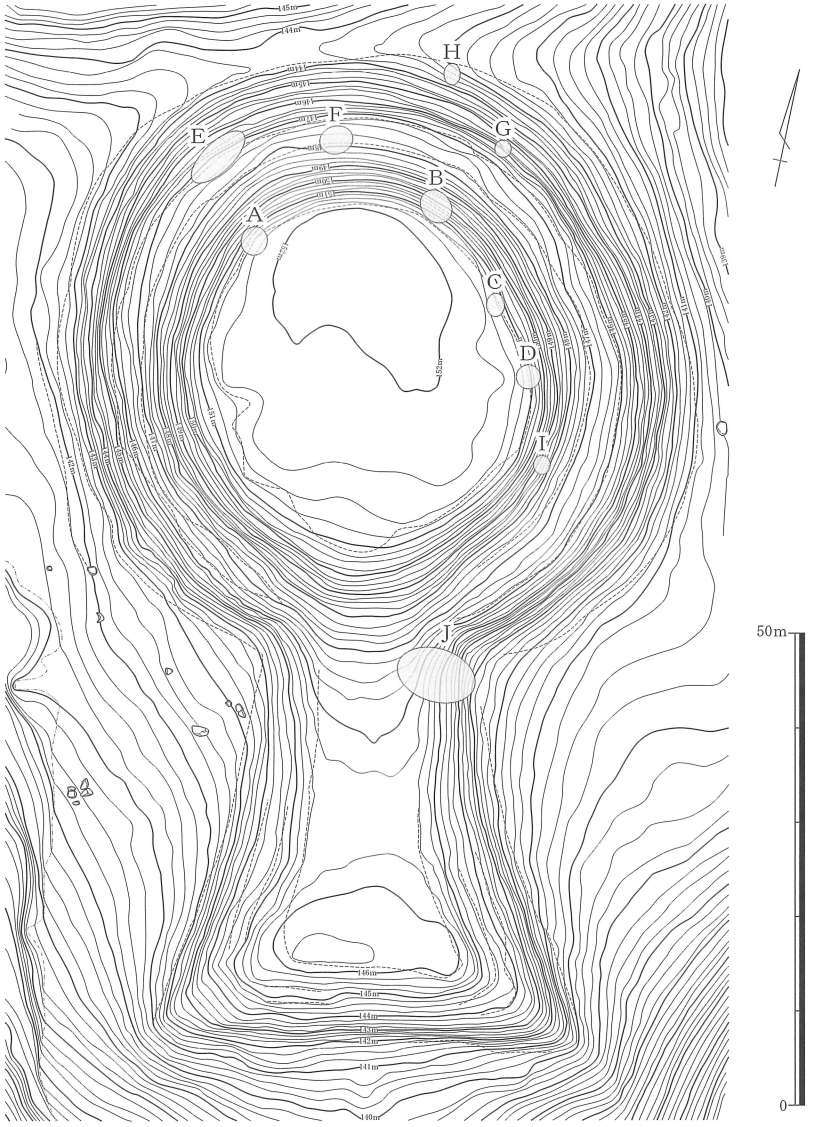
後円部・前方部とも２段築成の前方後円墳で、全長105ｍ（後円部63ｍ、前方部42ｍ）を測る。後円部はやや楕円形を呈し短軸幅で64ｍを測る。前方部正面幅は約45ｍで、後円部の高さは裾から11ｍを測る。墳丘斜面の傾斜はきつく約30度である。段築によるテラス面は後円部や前方部正面付近で明瞭であるが、前方部側面において不明瞭である。後円部と前方部のテラス面は連続しないと考えられる。

墳丘斜面には葺石が認められる。特に後円部北側斜面で顕著であり、ほぼ露出した状態にある。石材は花崗閃緑岩、砂岩、泥岩が用いられており、吉備中山で採取が可能な石材と考えられる。また、後円部の墳頂平坦面に輝石安山岩が認められており、瀬戸内海の豊島や小豆島の石材に類似しているという。この石材には辰砂の粉が付着していることから、埋葬施設に伴うものである可能性が考えられ、注目される。

（２）採集遺物の点数と採集位置

採集位置で記録があるのは、平成19・20年度に採集したものだけである。その他については調査による採集ではなく、古い時期の採集によるものもあり、細かい位置について詳らかではない。しかし、平成20年度の採集位置がおおむね後円部に限られていることから、これまでの採集遺物も後円部での採集であった可能性が高いと考えられよう。平成20年度の測量調査においては、もっとも多い105点の遺物が採集された。内訳は埴輪104点、土器１点と考えられるが、摩滅・剥離した破片が多い。

採集位置は後円部に偏り、前方部では採集されていない。後円部の中でも主に北側に集中するほか、東側



第３図　大吉備津彦命墓　平成20年度遺物採集位置図（1/800）

～くびれ部(東側)に点在する。西側では採集されていないが、墳丘斜面やテラス面に崩れの見られる箇所であるため、墳丘の遺存状況が影響している可能性が考えられる。遺物の取り上げ箇所は20箇所であるが、破片の位置関係が近接しているところも多く、範囲としては10箇所にまとめられる（第３図）。

具体的には、墳頂平坦面縁辺部とその周辺４箇所（Ａ～Ｄ）、テラス面３箇所（Ｅ～Ｇ）、墳丘斜面２箇所（Ｈ・Ｉ）、くびれ部１箇所（Ｊ）である。墳頂平坦面縁辺部での採集が多く、この位置に埴輪を樹立していたことは確実であろう。テラス面でも比較的多く採集されており、埴輪樹立の可能性が考えられるが、上からの転落であるかもしれず、確定はできない。墳丘斜面は上からの転落であり、くびれ部ではテラス面に相当するレベルと斜面～裾付近に散在している。

なお、埴輪の樹立が確実視される墳頂平坦面における採集位置の間隔は、Ｂ－Ｃ、Ｃ－Ｄ間で約10ｍと等間隔である。さらに、Ａ－Ｂ間は約20ｍであり10ｍで等分される。また、Ｄからは底部の破片が採集されている。このことから、推測の域をでるものではないが、墳頂平坦面縁辺部での採集位置は、樹立間隔など何かしら原位置を反映している可能性もあろう。

２　遺物の所見

（１）大吉備津彦命墓の採集遺物

宮内庁所蔵分

諸陵寮期に所蔵となったものが８点、平成19年度に採集されたものが４点、および平成20年度に採集されたものが105点の、合計117点を数える。内訳は埴輪片116点、土器片１点である。

挿図の作成にあたり、断面を中央にして、右に外面、左に内面を配置した。また、表層部分が著しく摩滅あるいは剥離している場合を含めて、その面の掲載を省略したものもある。

なお、遺物番号の横、括弧内に示したアルファベットは採集位置、丸囲い数字は砂礫種の観察結果をまとめた表１の資料番号に対応する。

埴輪（第４～７図、図版１・５・６）

諸陵寮期採集遺物（第４図、図版１－１、図版５-１・２）　採集時期は不明である。いずれも器台形埴輪[(4)]の破片と考えられる。線刻による文様の残る破片が４点、確認できない破片が４点である。また、胴部の破片が７点と底部の破片が１点である。口縁部の破片はない。色調はいずれも茶褐色～暗茶褐色を呈する。

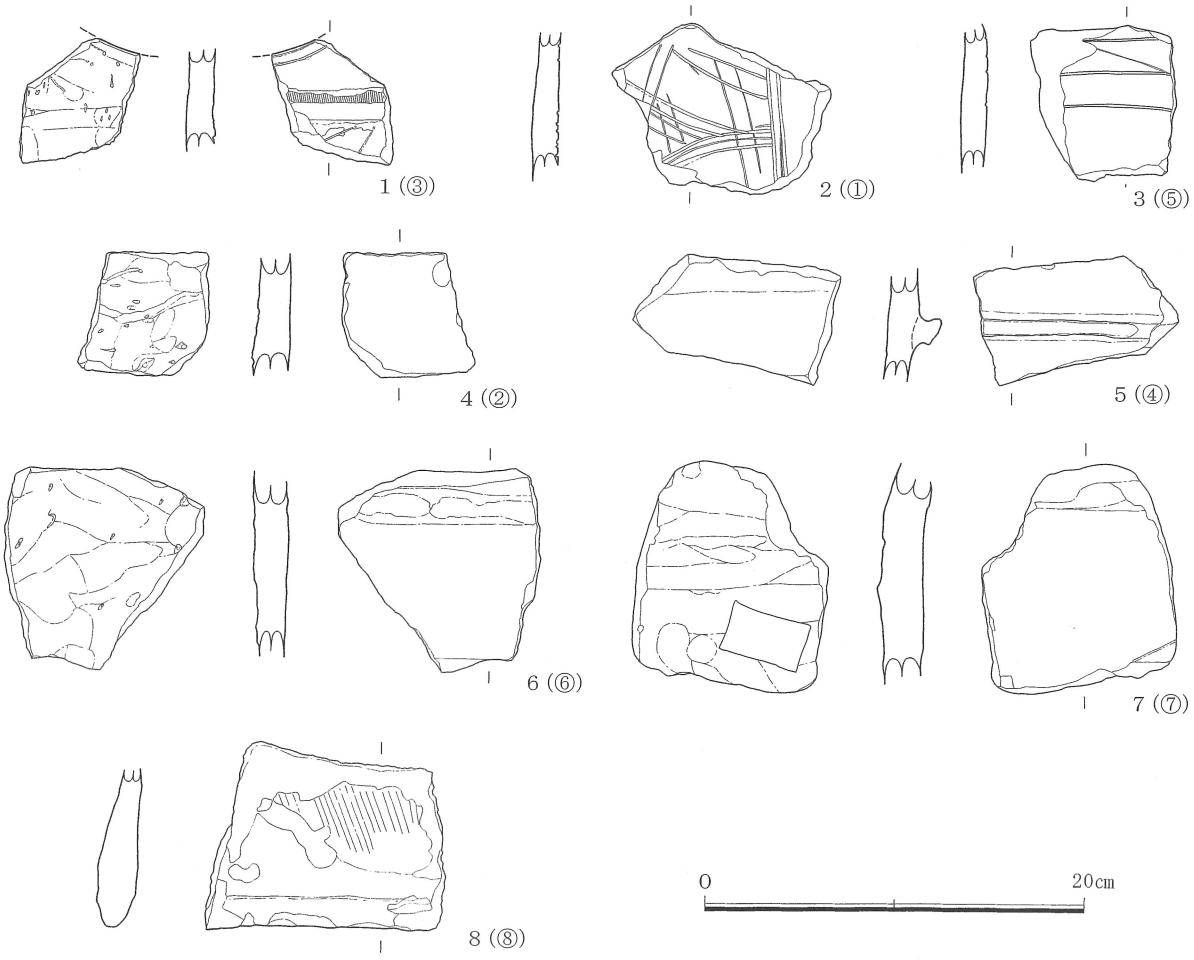
調整は、摩滅や剥離で不明なものを除くと、ハケメ、指ナデ、ヘラ削りが認められる。１・４・６は、外面が指ナデ、内面はヘラ削りと考えられる。１の外面では、突帯剥離面にタテハケが認められる。この３点は外面に赤色顔料が残存しており、同一個体である可能性がある。底部である８は、外面にやや粗いタテハケ、内面は指ナデが認められる。その他は、指ナデ調整と考えられるが、いずれも不明瞭である。

文様は、１・２・３・７で確認される。いずれも断片であるため、全体の構成は不明である。１は、突帯の上に透孔に沿った１本の線刻が弧状に廻る。下には右上がりに三角形を呈する２本の線刻が認められる。２は、基本的に近接する２本１単位の線刻が、弧状あるいは直線状に交錯するように施され、やや複雑な文様となっている。３は３本の線刻が平行するが、下２本はわずかに弧状を呈する。上２本の間に、左上がりの細い線刻が認められる。７は右下端に線刻がある。

透孔は、１で弧を描く透孔が認められるが、巴形になるか否かは不明である。他には透孔は認められない。

形態その他の特徴であるが、各破片の器壁は厚さ1.5～２㎝を測る。また、５・６・７は突帯付近の破片である。５のみ突帯が残り、断面形状は上端・下端がやや突出している。１で突帯接合位置に幅１㎝ほどの凹線が見られる。底部である８の底面は平坦ではなく、丸みをもっている。

ところで、１～７と８では整理番号が異なっている。採集時期が異なることによると考えられ、注記等にもそれは表れている。１～７には、「大吉備津彦命墓兆域ヨリ拾獲」と書かれた紙札が伴い、「大吉備津乃



第４図　大吉備津彦命墓　採集遺物実測図（１）〔諸陵寮期〕(1/4)

墓」と書かれた紙札が貼られた破片もある。一方、８は「岡山県吉備郡真金村大吉備津彦命墓石段ニテ拾獲」と書かれた紙札が伴うほか、埴輪そのものには「拾獲」を「採集」に変えて、同文の注記がなされている。８は、整理番号による限り、後述する矢部大坑古墳の埴輪と採集の機会が同じであったと考えられる。本墓周辺で「石段」の候補になるものは拝所の石段しかない。そのため、これを指している可能性が高いと考えられるが、墳丘からは離れた位置になる。さらに、後述の奥田氏による砂礫種の観察結果(表１)によれば、観察資料中で８のみ砂礫種構成の異なる結果が出ている。本墓での採集になることは確実と考えられるものの、採集時期・細かい採集位置や砂礫種など、いずれも他の破片と異なることから、８の評価については若干の注意が必要かもしれない。

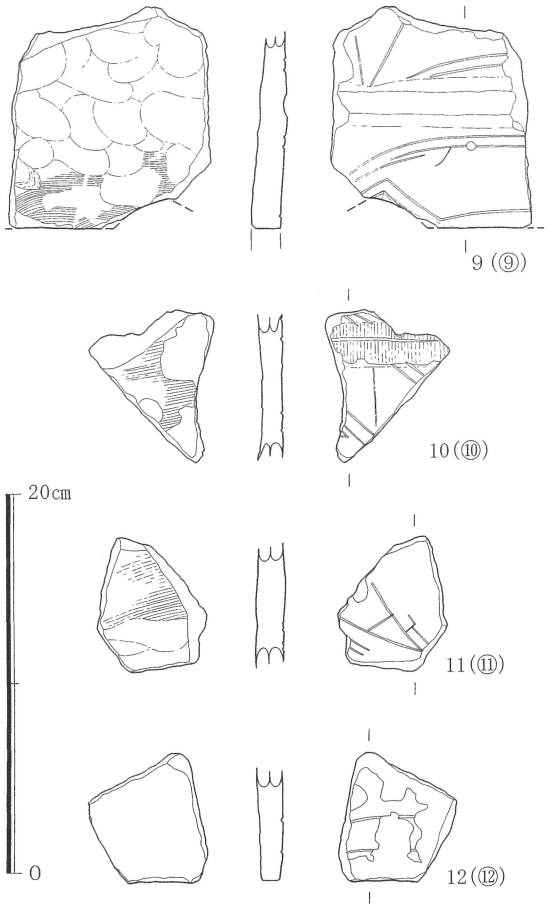
平成19年度採集遺物（第５図、図版５－３）　第３図のＢに相当する位置で採集された。いずれも器台形埴輪の破片と考えられる。４点すべてに線刻による文様が残る。また、すべて胴部の破片であり、口縁部・底部の破片はない。色調はいずれも茶褐色～暗茶褐色を呈する。11・12は外面に赤色顔料が残存している。

調整は、摩滅や剥離で不明なものを除くと、ハケメ、指ナデ、指オサエ、ヘラ削りが認められる。９～11は、外面が指ナデ、内面は指オサエ・指ナデの後に、ヨコハケを施している。10の外面は、指ナデの前にタテハケの施されていることが、突帯剥離面から確認できる。12は外面が指ナデで、内面は摩滅で不明である。

文様は、いずれも断片であるため、全体の構成は不明である。近接する２本１単位の線刻を、直線あるいは弧状に施している箇所、あるいは三角形状の線刻が目立つ。９は、突帯を挟んで上下に文様がある。上は２本１単位の線刻が突帯に沿って緩やかな弧を描き、突帯に接して収束する。その左に逆三角形状の文様

が描かれる。下は、２本１単位の線刻が緩やかに弧を描き、その下方に、透孔に沿った１本の線刻が施される。10も突帯を挟んで上下に文様がある。近接する２本１単位の左上がりの線刻が施され、突帯を挟んで連続するような構成になっているようである。後述する第６図26に類似するものであろうか。また、縦方向に１本の細い直線の線刻が認められるほか、下端付近には三角形の頂点と思われるような線刻がわずかに認められる。11は、三角形状の線刻を中心に、２本１単位の線刻も認められる。12は、透孔に沿ってやや離れた線刻２本が緩やかに弧を描いている。透孔は９・12で確認できる。９は、図上右側で水平な辺が、左側で上方に三角形状にくり込まれている。これが全体としてどのような形状になるかは不明である。12は、摩滅のためやや不明瞭であるが、緩やかな弧を描く透孔である。巴形になるか否かは不明である。

形態その他の特徴は、各破片ともに、器壁は厚さ約1.5cm前後を測る。また、突帯剥離面に見られる突帯接合方法に２種あることが確認された。突帯接合位置には、９で幅約１cmの凹線が認められ、10では線刻が認められる。



第５図　大吉備津彦命墓
採集遺物実測図（２）〔平成19年度〕(1/4)

平成20年度採集遺物（第６・７図、図版１－２、図版６－１）　埴輪27点、土器１点を図化した。採集資料全体では表層部分の摩滅・剥離した破片が多く、調整痕が不明瞭である。また、破片数の約７割は無文の破片であるが、突帯や透孔の情報の得られないものが大半を占める。そのため、結果的には文様のある破片を中心に、部位や形態を把握できるものを中心に図化した。挿図だけ見ると文様をもつ破片ばかりのような印象を受けるが、必ずしも有文の破片数が多いことを示すものではない点、ご注意願いたい。

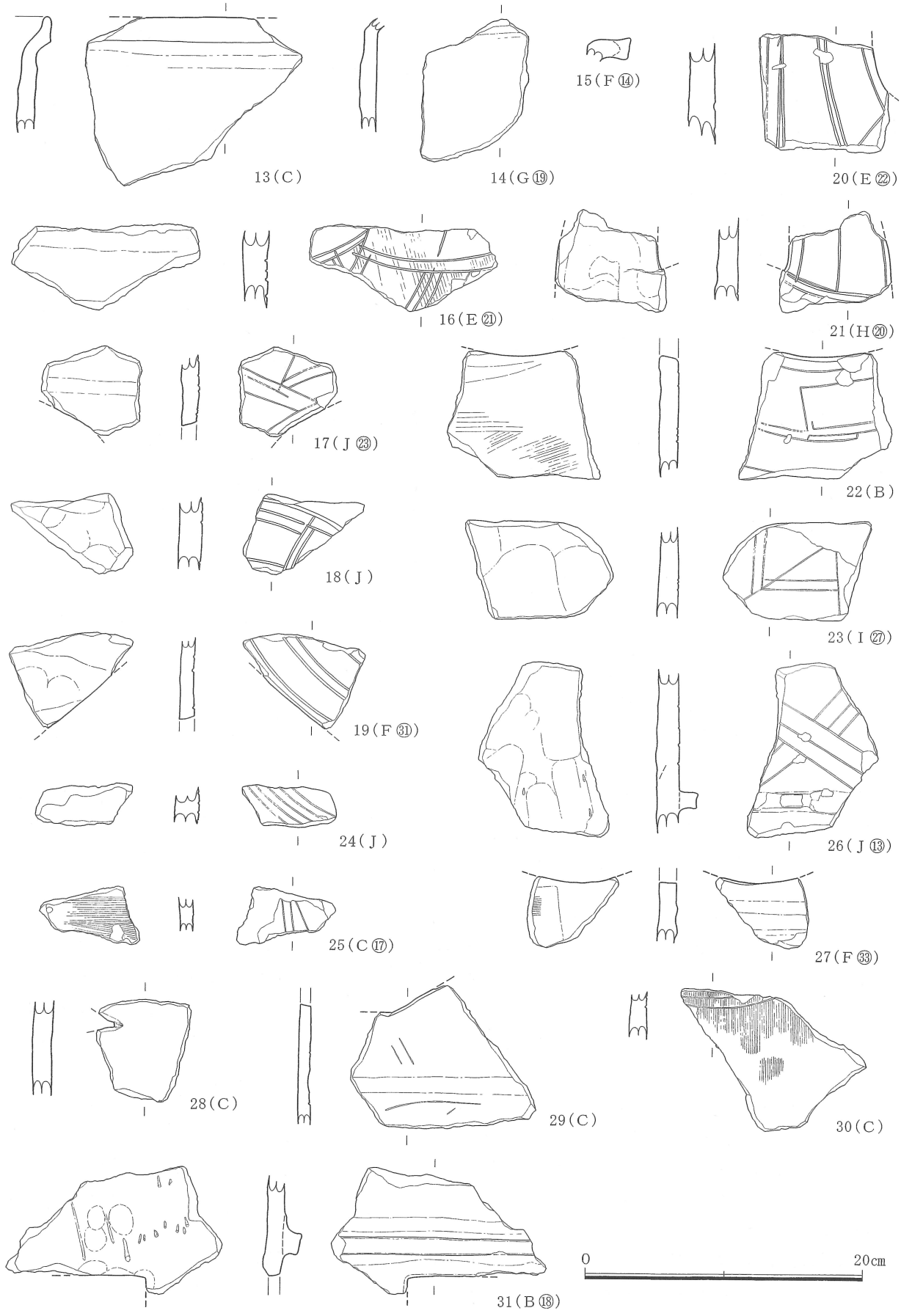
埴輪には、器台形埴輪と壺形埴輪がある。

器台形埴輪は、口縁部(第６図13～15)、胴部(第６図16～31、第７図32)、底部(第７図33・34)の破片が確認されており、他の時期の採集資料と異なり、点数も多い。そのため、胴部以外に口縁部と底部の特徴から、断片的ではあるが器形を推定する情報が得られる。１は無文の有段口縁であり、２も同様である可能性が考えられるが、端部が失われているため細かい口縁部形態は不明である。３は直立してきた器壁の端部がほぼ直角に近く屈曲する形態を示す。33・34はいずれも直立する底部で、底面は平坦である。

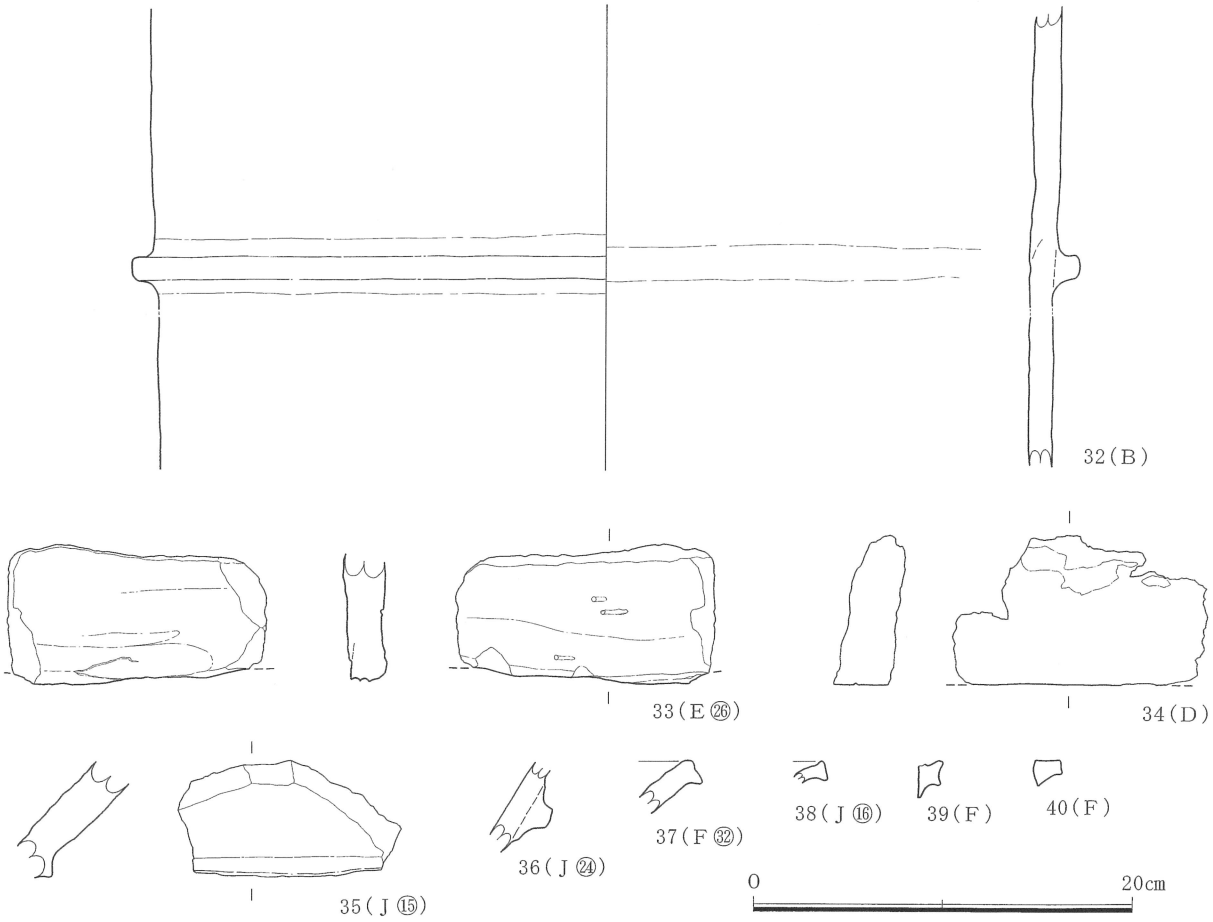
調整は、ハケメ、指ナデ、指オサエ、ヘラ削りが認められるが、摩滅や剥離で不明なものが多い。16・22・25・27・30で明瞭なハケメを確認できる。破片からは外面にタテハケ、内面にはヨコハケを施しているようである。指ナデは最も多く確認でき、内面では単位の見えるものもある。指オサエは一部指ナデとの区別が難しいものもあり、主体的な調整方法ではないようである。ヘラ削りは内面に認められ、26・31でみられるが、削りの単位は不明瞭である。

文様は、全体の構成が不明である。16～21、29・30は、弧状に施された近接する２本１単位の線刻が顕著で、16・17では弧状の線刻の先端が接合し、三角形状となる個所が認められる。第４図２や第５図11にも同様の線刻がみられる。

22は弧状の線刻に鍵手状に施された直線の線刻が認められ、23では弧状の線刻はないが鍵手状にみえる２



第６図　大吉備津彦命墓　採集遺物実測図（３）〔平成20年度〕(1/4)



第７図　大吉備津彦命墓　採集遺物実測図（４）〔平成20年度〕(1/4)

本１単位の直線の線刻が確認できる。弧状の線刻は、透孔に沿って廻るもの(17・19・20～22)が多く認められる。24は、５本の近接する線刻が緩やかな弧状をもって施されている。本墓採集といわれる埴輪片の文様に類似しているが[5]、交差する線刻は認められない。

26は、左上がりの３本の直線に交差する２～３本の直線を配する線刻が認められる。第５図10も同様の文様と考えられようか。

なお、25は破片が小さいため比較が難しく、29は突帯を挟んで上下に文様が認められる。

透孔は、弧状を呈するものが多い(17・19・20～22・27)。緩やかな弧を描く。全体の形状は不明である。28は巴形透孔の一部であろうか。29は屈曲が鈍角となる透孔で全体の形状は不明である。第５図９も類似する形状を呈しており、突帯を挟んで上下に文様を配する点も共通している。31は方形もしくは長方形、あるいはＬ字形などの透孔の一部であろう。

形態その他の特徴は、各破片ともに、器壁は厚さ約１～1.5cm前後を測る。割合としては1.5cm前後のものが多い。また、突帯は、26・31・32に残るほか、剥離したものの断面を39・40に示した。やや突出度が高く、端部をつまみ出すものが多いようである。32は磨滅のため細部の形態は製作時の状態をとどめていない可能性がある。40は端部に明瞭な稜のある、やや細めの突帯である。突帯剥離面では、29の突帯接合位置に、幅約１cmの凹線が見られる。

壺形埴輪（第７図35～37）は口縁部のみ確認できる。二重口縁の一部である。

調整は、37で明瞭な指ナデが認められるが、その他は磨滅等で不明瞭なものが多い。破片じたいも小さいため得られる情報も少ないと言わざるを得ない。

土器（第７図38）

土器は１点のみである。外側に屈曲する口縁端部の破片で、赤褐色を呈する。砂礫種は観察の結果、埴輪と変わらない。土師器ではなく、墳丘盛土に含まれていた弥生土器の可能性もあろう。

岡山県古代吉備文化財センター所蔵分（第８図）

先述のとおり、厳密には「伝中山茶臼山古墳埴輪」として扱われるものである(6)。接合関係があるものは破片の点数に関わらず１点として数えて、９点が収蔵されており(7)、器台形埴輪と壺形埴輪と考えられる。１～４は器台形埴輪の胴部、５～７は壺形埴輪の肩～胴部と考えられる資料である。口縁部や底部の破片は含まれていないようである。上記９点のうち７点を図化したが、そのうち３は、接合関係から遊離した状態を単体で図化したものである。また、５～７の壺形埴輪の破片については、正置では内側に傾く形態を示すと考えられるが、正しい傾きを知ることができないため、便宜上平置きで図化したものである。いずれも茶褐色～黄褐色(黄橙色)に近い色調を呈している。器台形埴輪のうち、線刻による文様の認められるものは４点ある。図示したもののうち、４を除く破片に赤色顔料が残存している。

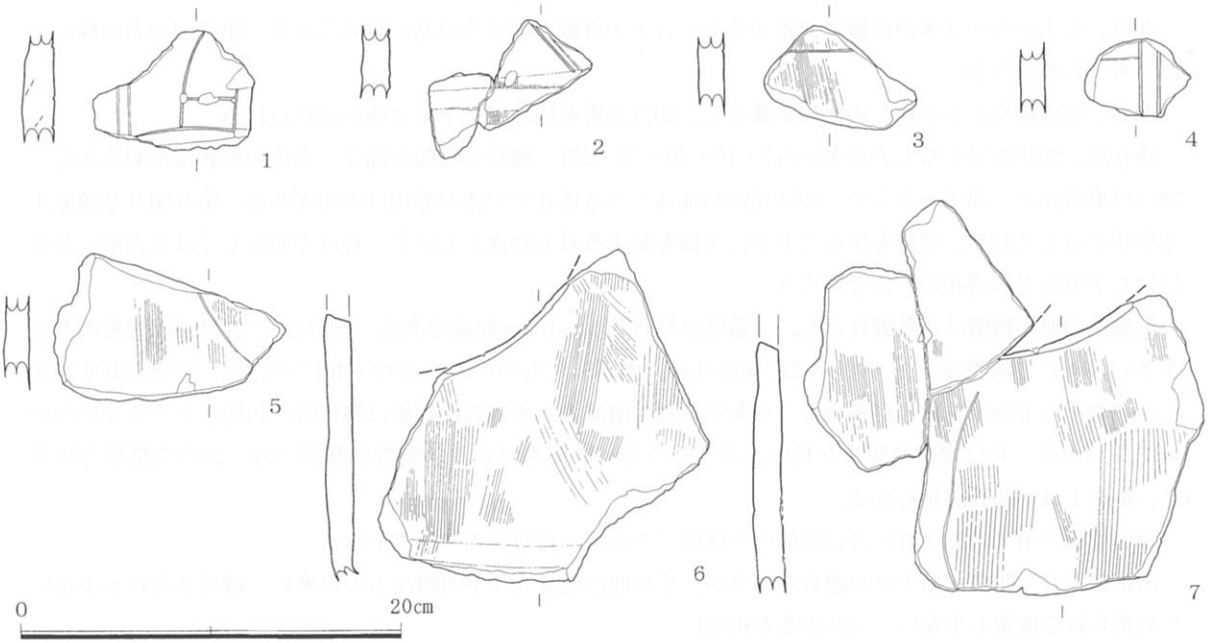
調整は摩滅や剥離で不明なものを除くと、ハケメ、指ナデ、指オサエが認められる。器台形埴輪のうち、２は内・外面、３は外面にタテハケが認められる。その他は、比較的平滑に仕上げられているので、丁寧なナデが施されているようである。

文様は、近接する２本１単位の線刻が１・２・４で認められる。１のみ緩やかな弧状を呈する線刻が確認でき、２～４は直線的な線刻である。５・７についても線刻が認められるが１本のみであり、何らかの文様を構成しているようにはみえない。

透孔は、器台形では１の右側面に透孔の１辺が認められるが、細かい形状は不明である。線刻の流れをみる限り弧を描く形状と考えられる。左端も透孔の可能性があるが、不明瞭であり確定できない。壺形では、７で肩部に大きな巴形透孔が穿たれている。６は確実に巴形と判断できる特徴がないため、円形の可能性もあろう。

形態その他の特徴については、２の器台形埴輪の胴部破片は、突帯剥離面があり、突帯接合箇所に幅１cmほどの凹線が認められる。壺形埴輪と考えられる破片については、破片そのものが大きく、宇垣匡雅氏が指摘するように(8)、かなり大形の製品であることを推測させる。また、肩部と胴部の境付近に突帯が廻ると考えられる。

いずれの破片も、当部所蔵資料と諸特徴が一致していることから、本墓で採集された埴輪とみて問題ない

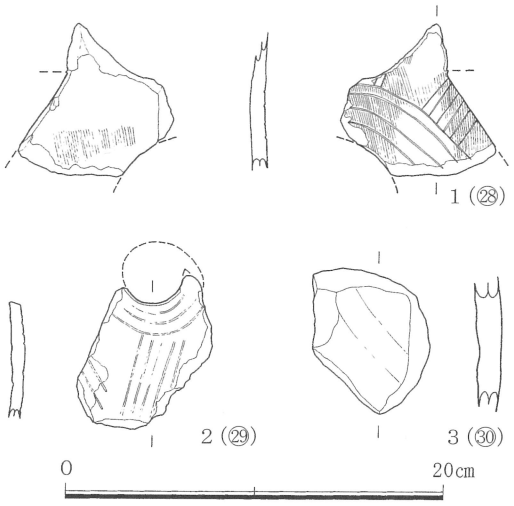


第８図　伝中山茶臼山古墳　採集遺物実測図（1/4）〔岡山県古代吉備文化財センター所蔵品〕

と考えられる。

（２）矢部大坑古墳の採集遺物（第９図、図版６－２）

矢部大坑古墳の採集遺物は、埴輪片３点である。「岡山縣都窪郡庄村大字矢部字大黒ト称スル所ニアリシ土器破片」と書かれた紙札を伴う。１・２で巴形透孔と１辺4.5cm以上を測る逆三角形透孔の一部を確認できる。また、線刻で蕨手文と直線帯を表現しており、文様の概略を知ることができる。各破片とも全体にやや摩滅が認められるが、１は内外面ともにタテハケが認められる。本墓の埴輪に比べると薄手で厚さ１cm前後である。１・２の文様から推定される破片どうしの位置関係から、突帯間隔は16cm以上になると考えられる。３は、外面が完全に摩滅しており調整は不明である。各破片とも明黄褐色～明赤褐色を呈し、２は赤色顔料の塗布が確認される。これらの埴輪の文様は、「都月型」と呼称されるもので、特殊器台形埴輪の一部を構成するものである。



第９図　矢部大坑古墳
採集遺物実測図〔諸陵寮期〕(1/4)

３　採集遺物の特徴

破片資料であるため全体像を把握するのは困難であるが、以下に採集資料の特徴をまとめておきたい。

（１）器台形埴輪

器形　円筒形の胴部破片が大半を占めており、器形の特徴となる口縁部や底部の破片は少ない。口縁部は、第６図13のような有段口縁が存在しており、14もその可能性がある。15は破片が小さく詳細は不明であるが、有段口縁とは異なる口縁部である。底部は、直立する形態のものが確認されており、第７図33・34は底面が平坦であるが、第４図８は底面が丸みをもち、異なる特徴をもつ。有段の形態をとる底部は含まれていない。

現在採集されている資料から考えられる器形としては、１）有段口縁と直立する底部をもつ円筒形、２）普通口縁と直立する底部をもつ円筒形、の２者を想定できようか。

構成　段数や突帯間隔については、判断できる破片がなく不明である。

大きさ　接合する破片が少なく、高さに関する数値を具体的に示すことはできない。第７図32では、胴部径を推定できるが、突帯を除く器壁外面で約47cmである。しかし、他の個体もすべて同程度の大きさであるかどうかは不明である。突帯間隔が判明する破片もなかった。

調整　もっとも多く見られる調整痕は、指ナデである。ハケメ調整で終了しているものは少なく、突帯剥離面の状況から、外面ではいったんハケメ調整を行った後に、突帯の接合とともに指ナデ調整を行ったと考えられる例が多いようである。内面のヘラ削りはその割合が少なく、主体的とはいえない。

文様　それぞれの破片どうしに明確な接合関係がないため、全体の構成は不明である。
第４図１、第５図９・10、第６図29など、突帯を挟んで上下に文様が認められるものがあるが、それ以外に段ごとの文様の有無などがわかる資料はない。

文様は断片的であるが、特徴から４つ程度にまとめられようか。

① 第６図16～21、29・30のように、弧状に施された近接する２本１単位の線刻を中心に、一部に16・17のように弧状の線刻の先端が接合し、三角形状となる。第４図２や第５図11にも同様の線刻がみられる。

② 第６図22ように、弧状の線刻に鍵手状に施された直線の線刻が認められ、23では弧状の線刻はないが鍵手状にみえる２本１単位の直線の線刻が確認できる。

③ 第６図24は、５本の近接する線刻が緩やかな弧状をもって施されている。過去に本墓で採集されたと

いわれる埴輪片の文様に類似しているが、直交する線刻は認められない。

④　第６図26は、左上がりの３本の直線に交差する２～３本の直線を配する線刻が認められる。第５図10も同様の文様と考えられる。これらは、「都月型」と呼称される文様の一部に類似するとみることが可能かもしれない。

24は５本の線刻がまとまっており、「都月型」とはやや趣が異なる。

これらは別個の文様ではなく、つながって１段分を埋める文様帯を構成するのであろう。

線刻については、細いものと太いものがあるが、その違いと文様に対応関係はないようである。また、同じ文様内でも線刻の細いものと太いものが混在する例がある。基本的には工具の先端形状や施文の際の工具の角度などにより違いが生じたものと考えられる。

透孔　文様と同様に、破片どうしの明確な接合関係がないため、全体の形状は不明である。弧状を呈する透孔が多いが、カーブが非常に緩やかであり、巴形や円形になると考えられるが、ある程度大きなものに復元できそうである。また、第５図９や第６図29では不整形な多角形を推定させる。三角形や方形(長方形)のような定型的な透孔は、現在確認している資料中には少ないようである。

その他　突帯の接合については、剥離した資料の多いことが特徴のひとつといえるかもしれない。突帯剥離面には多くの場合、幅１㎝ほどの凹線が認められ突帯の貼付位置を示していたと考えられる。一方、第５図10のように、線刻により位置を示した事例もある。

なお、多くの破片に赤色顔料が確認されており、本来はすべての個体に塗布されていた可能性が高いと考えられる。

以上、限られた大きさの破片をもとにしたものではあるが、特徴をまとめてみた。第６図13に示した有段口縁の存在と、全体の構成は不明ながら線刻による文様がある。これらの特徴は「特殊器台形埴輪」の主要な構成要素であることから、本墓採集埴輪には、特殊器台形埴輪が含まれている可能性が高いといえよう。ただし、先に挙げた矢部大坑古墳採集資料に見られるような、「都月型」と呼称される特殊器台形埴輪の典型的な文様ではない。一部に第５図10や第６図26のように、都月型文様の一部に類似するものがあるにとどまっているようである。また、明らかに有段口縁とは異なる口縁部も確認されることや、無文の破片が多く、第７図32のように、突帯を挟んで上下とも無文の場合もある。このことから、普通円筒も少なからず含まれていることが考えられる。

（２）壺形埴輪

器台形埴輪に比べて、破片数が非常に少ないため、全体像を把握するのはさらに困難であるが、簡単にまとめておきたい。

器形　口縁部は二重口縁の破片が確認されているが、頸部に関しては不明である。肩部は岡山県古代吉備文化財センター所蔵資料中に破片がある。大形の製品になると考えられる。断面の形状から、球形ではなく直線的に頸部にいたる形態が推定される。また、胴部には突帯を貼り付けた指ナデの痕跡が認められることから、肩部と胴部の境あたりに突帯が廻るようである。底部付近の破片は確認されなかった。

調整　外面はハケメ調整が顕著である。内面は指ナデ、あるいは指オサエが認められる。

文様　岡山県古代吉備文化財センター所蔵資料中の、壺形埴輪と考えられる破片に線刻が認められるが、何らかの文様を構成していると考えられるだけの残存状況ではない。文様があったかどうかも不明とせざるを得ない。

透孔　第８図７の破片では、大形の巴形透孔が確認されている。６も同様の大きさになると考えられ、部位も同じ肩部であることから、巴形である可能性が考えられる。

肩部と胴部の境付近に突帯が廻ると考えられることから、特殊壺に系譜が辿れる壺形埴輪ということになろうか。

ま と め

以上、大吉備津彦命墓について、当部がこれまでに所蔵していた資料、また、新たに採集した資料を中心に報告を行ってきた。

器台形埴輪は、これまで文様のある破片が部分的に知られてきたことから、特殊器台形埴輪の存在が指摘されてきたが、口縁部として新たに有段口縁が採集されたことで、特殊器台形埴輪の存在がより確実になったといえる。また、普通口縁も存在することから、普通円筒埴輪と共存する可能性が考えられる。一方、一部に類似すると考えられる文様は認められたが、典型的な都月型の文様は確認されていない。

また、壺形埴輪については、口縁部の小片以外に、明瞭な破片が確認されていなかったため、岡山県立古代吉備文化財センターの所蔵資料も併せて紹介できたことにより、ある程度は、本墓の埴輪の全体的なあり方が明らかになってきたといえるかもしれない。

改めて、本墓の埴輪を報告するにあたってご協力いただいた各機関・関係者の方々に感謝申し上げたい。

本報告が、少しでも研究に寄与するところがあれば、幸いである。　（清喜裕二）

註

（1） 佐藤利秀「大吉備津彦命墓整備工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第33号、宮内庁書陵部、1982年。

（2） 宮内庁書陵部陵墓課編『埴輪Ⅴ』、宮内庁書陵部、2006年。

（3） 吉備中山総合調査委員会編『吉備中山総合調査報告』、岡山市教育委員会、1975年。

近藤義郎「最古の前方後円墳」『吉備の考古学』、福武書店、1987年。

宇垣匡雅「センター収蔵品紹介vol.8　－中山茶臼山古墳出土埴輪－」『所報　吉備』第49号、岡山県古代吉備文化財センター、2010年。

（4） 本報告で扱う埴輪片は小さいものが多く、全体像が不明瞭であるため、通常行われる分類にあらかじめあてはめることが難しい。記述の都合上、ひとまず下記文献で示された用語に従って表記する。

酒井将史「吉備における埴輪の成立と展開」『円筒埴輪の導入とその画期』発表要旨集・前期古墳出土埴輪集成、中国四国前方後円墳研究会第13回松山大会実行委員会、2010年。

（5） 註（3）のうち、近藤氏文献。

（6） 現在、岡山県古代吉備文化財センターが収蔵している「伝中山茶臼山古墳埴輪」は、昭和59年11月の同センター設立以前に、同所にあった「岡山県立吉備青年の家」にあったものであり、それを引き続いて同センターが収蔵している。

なお、同青年の家にこの資料がもたらされた経緯は不明である。

（7） 註（3）文献のうち、宇垣氏文献に写真が紹介されている。

（8） 註（3）のうち、宇垣氏文献。

大吉備津彦命墓採取埴輪の表面にみられる砂礫

奥田　尚

はじめに

大吉備津彦命墓で採取された埴輪等の表面にみられる砂礫を裸眼と倍率25倍の実体顕微鏡で観察した。観察した砂礫種とその砂礫構成から推定される砂礫の採取地について述べる。

1　砂礫種の特徴

観察した砂礫種は花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、泥岩、片岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。これらの特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大６㎜である。石英と長石が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰色で、粒形が角、粒径が最大５㎜である。石英・角閃石、長石・角閃石、石英・長石・角閃石が噛み合っている。角閃石には針状をなし、結晶面で囲まれているものがある。

流紋岩：色は淡茶灰色で、粒形が亜円、粒径が最大1.5㎜である。石基はややガラス質で、石英の斑晶がみられる。

砂岩：色は褐色で、粒形が亜円、粒径が最大１㎜である。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色、暗灰色、茶色、黄土色で、粒形が角、亜角、粒径が最大３㎜である。風化した古期層の泥岩の様相を呈する。

片岩：色は灰色、褐色、暗灰色、淡茶色で、粒形が角、粒径が最大２㎜である。石種は泥質片岩、絹雲母片岩、石英質片岩、紅簾石片岩である。

火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.5㎜である。貝殻状、フジツボ状、束状をなす。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大1.5㎜である。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、淡桃色で、粒形が角、粒径が最大３㎜である。パーサイト構造がみられるものがある。

黒雲母：黒色、金色で、板状、粒状を呈し、粒径が最大１㎜である。

角閃石：黒色で、粒形が角、粒状や柱状を呈し、粒径が最大３㎜である。結晶面がみられるものがある。

2　砂礫構成と砂礫の採取地

砂礫構成をもとに類型に区分すれば、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅠ類型、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅡ類型、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅣ類型、片岩起源と推定される砂礫を主とするⅧ類型に区分される。更に、副となる少量の砂礫をもとに細区分すれば、Ⅰ類型はⅠb・Ⅰbd・Ⅰbdg・Ⅰbg類型に、Ⅱ類型はⅡa・Ⅱad・Ⅱag類型に、Ⅳ類型はⅣab類型に、Ⅷ類型はⅧg類型に区分される。更に、砂礫相を考慮して砂礫の採取地について述べる。

大吉備津彦命墓が位置する丘陵はチャートや砂岩の岩体が含まれる古期のメランジュからなり、メランジュ形成後に貫入した花崗閃緑岩～閃緑岩の岩体が分布する。東方の万成山付近には桃色の長石が顕著な黒雲母花崗岩が分布し、西方の加茂付近の山地や足守川の上流にも花崗閃緑岩～閃緑岩の岩体が分布する。

Ⅰbdg類型・Ⅰbg類型・Ⅱag類型に含まれる泥岩粒は当墓付近の地山の風化した泥岩と岩相的に似ている。泥岩粒は土製品製作時に捏ねる時間が長くなれば砕けてしまうような様相を呈するものであり、観察時に土製品の基質と泥岩粒とを識別できなかった資料がある可能性もある。泥岩粒を除けばⅡa類型で在地とした砂礫構成もⅡag類型の砂礫構成と似ている。当墓付近には花崗閃緑岩や閃緑岩の岩体が分布することから、当丘陵の花崗閃緑岩～閃緑岩分布地付近の砂礫を使用してⅠbdg類型・Ⅰbg類型・Ⅱag類型・Ⅱa類型の

区分に属する土製品を製作したと推定される。閃緑岩粒に針状の角閃石が含まれ、角閃石粒に結晶面がみられる加茂付近としたⅠbd類型・Ⅱad類型の砂礫は岡山市加茂付近の砂礫に似ている。この砂礫構成は各地で出土している特殊器台や特殊壷・吉備系土器の多くにみられる。足守川としたⅠbd類型・Ⅱad類型の砂礫は足守川の何処かの砂礫と推定される。また、足守川と推定した資料13・15・16・21には桃色の長石粒が含まれる。桃色の長石を含む花崗岩は当付近では万成山付近に分布し、この山地の砂礫が足守川に流出した付近がこれらの資料の砂礫採取地と推定される。Ⅰb類型の砂礫は総社平野北方付近の砂礫と推定される。Ⅷg類型の砂礫には紅簾石片岩がみられることから、紅簾石片岩が分布する紀ノ川下流、吉野川、新居浜市付近等が推定されるが、新居浜市付近では花崗岩起源の砂礫も含まれる。吉野川下流の徳島市付近か紀ノ川下流の和歌山市付近が砂礫の採取地と推定される。

以上のように観察した資料は僅かであるが、土製品にみられる砂礫の採取推定地は近くで当陵墓付近、加茂付近、足守川、足守川の下流域、総社平野の北部、遠くで徳島市付近か和歌山市と少なくとも6か所が推定される。

表１　土製品の表面にみられる砂礫

資料番号	器種	石種																鉱物種										類型と砂礫の採取推定地
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石		
		裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	裸眼	25倍	
大吉備津彦命 M7-6の3　1		L-僅角	L 稀角		L-稀角		M-稀亜円										M 微貝フ	M-僅	M-多 E 多	M-中	M-僅				S 稀			Ⅳab類型 産地不明
大吉備津彦命 M7-6の5　2			M 稀角		M 稀角														M-中 E 僅	M-微	M-僅		M 微粒	L-僅	L-僅			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 M7-6の7　3			L-微角														M 僅貝		M-僅 E 稀	M-僅	M-僅				S 僅 EF僅			Ⅰbd類型 加茂付近
大吉備津彦命 M7-6の4　4		L-微角	L-微角	M 稀亜角													M-微貝フ	M-僅	M-多 E 僅	M-微	M-僅		M-微板	M-微	M-僅			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 M7-6の6　5		L-微角		L-僅角	L-僅角													M-僅	M-中 E 僅	M-僅	M-中		M 稀板	M-中	M-多			Ⅱad類型 足守川
大吉備津彦命 M7-6の2　6		L-僅角	L-微角	L-僅角	L-僅角														M 微	M-僅	M 僅	M-微板	M 微板粒	L-多	L-非			Ⅱa類型 在地
大吉備津彦命 M7-7の1　7		L-稀角	L-僅角		L-僅角													M-僅	M-僅	L-中	M-僅	M-僅板	L-微粒板	L-中	L-非			Ⅱa類型 在地
大吉備津彦命 K9-0の6　8									L 稀亜円	L-僅亜角					L-多角			M-微	M 微	M-微								Ⅷg類型 徳島市付近か
大吉備津彦命 0101－1　9		M-微角	M 微角		M 稀角												M 微貝フ	M-僅	M-多 E 僅	M-多	M-中				M-中 EF中			Ⅱad類型 加茂付近
大吉備津彦命 0101－4　10		M-微角	M 微角															S 微	M-多 E 僅	M-中	M 僅				M 微			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 0101-2　11		M-微角	L-僅角		L-微角														M-多 E 僅	M-多	M-中				M-僅 EF多			Ⅰbd類型 加茂付近
大吉備津彦命 0101-3　12			L-微角															S 稀	L-多 E 僅	M-僅	M-僅				M 僅 EF中			Ⅰbd類型 加茂付近
大吉備津彦命 0902-19　13		L-微角	L-僅角	L-稀角													M 微フ貝		M-中 E 僅	L-中	L-僅			M-稀	M-中			Ⅱad類型 足守川
大吉備津彦命 0021-2　14	壷	L-微角	L-微角		L-稀角						M-稀亜角								M-僅		M-僅		M 稀粒板		M-中			Ⅱag類型 在地
大吉備津彦命 0009-1　15		L-微角	L-微角														M 僅束貝		L-中 E 微	L-僅	M-中		M-僅粒	M-僅	M-僅			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 0006-6　16	壷		L-微角																L-中 E 微	M-中	M-多		M 微粒		L-僅			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 0018-10　17		L-微角	L-僅亜角														M 僅貝束	M-僅	L-中	M-多	L-中				M 稀			Ⅰb類型 総社平野北部

大吉備津彦命 0016-1　18		L-微 亜角	L-僅 角															L-稀	L-多	M-多	L-中			M-稀	S 微			Ⅰb類型 総社平野北部
大吉備津彦命 0004-1　19		M-微 角	M 稀 角		M 稀 角												M 僅 貝束	M-僅	L-多 E 中	M-中	L-多				M-微 EF多			Ⅰbd類型 加茂付近
大吉備津彦命 0005-1　20		L-稀 角	L-僅 角		M 稀 角						L-稀 亜角								L-多 E 中	M-中	M-中				M-僅			Ⅰbdg類型 在地
大吉備津彦命 0001-1　21		L-僅 角	L-僅 角														M 微 貝		L-多 E 中	M-多	M 多		M 稀 板粒		M-微			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 0001-2　22		M-稀 角	L-微 角		L-僅 角													M-微	M-中 E 僅	M-多	L-中			M-稀	M-中 EF微			Ⅱad類型 加茂付近
大吉備津彦命 0006-1　23		L-微 角	L-僅 角		L 微 角												M 微 フ貝	M-微	M-多 E 微	M-多	M-多				M-僅			Ⅰbd類型 足守川
大吉備津彦命 0006-2　24		L-僅 角	L-僅 角														M 稀 貝	M-僅	M-多 E 僅	M-多	M-多				L-中			Ⅱad類型 足守川
大吉備津彦命 0005-1　25		L-僅 角	L-僅 角															L-僅	L-中 E 僅	M-中	M-中				M-中			Ⅱad類型 足守川
大吉備津彦命 0003-1　26			L-僅 角		L-僅 角													M-中	M-多 E 僅	M-僅	L-多		M 微 板粒	M-僅	M-中			Ⅱad類型 足守川
大吉備津彦命 0010-1　27		L-僅 角	L-僅 角		L-微 角													M-僅	L-多 E 僅	M-多	L-多				M-中			Ⅱad類型 足守川
大吉備津彦命 0020-1　31		L-稀 角	L-微 角								L 稀 亜角						M 稀 フ	M-僅	M-多	M-僅	M-僅			M-稀	M-微 EF多			Ⅰbg類型 在地
大吉備津彦命 0020-11　32			L 微 角								M 微 亜角								M-多 E 中		M-僅				M-僅 EF多			Ⅰbdg類型 在地
大吉備津彦命 0020-5　33		M-僅 角	L-僅 角								L-稀 亜角								M-多 E 中	M-中	M-僅				M-微			Ⅰbdg類型 在地
矢部大坑 9-1　28	特殊器台	M-稀 角	M-微 角	M-微 角														M-僅	L-多 E 多	M-微	M-中			M-微	M-僅 EF多			Ⅰbd類型 加茂付近
矢部大坑 9-1　29	特殊器台		L-微 角		M 稀 角													M-僅	M-多 E 僅	M-中	M-僅			M-僅	M-僅 EF多			Ⅰbd類型 加茂付近
矢部大坑 9-1　30		L-僅 角	L-僅 角		M 稀 角													M-中	M-多 E 中	M-中	M-僅			M-微	M-僅			Ⅱad類型 足守川

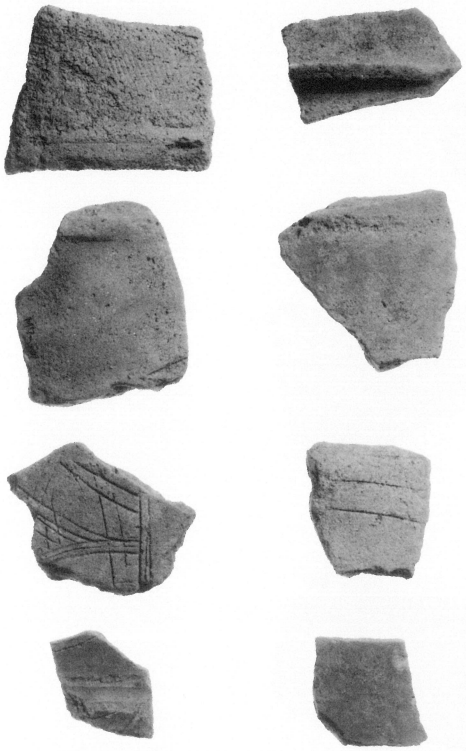
裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径が2㎜以上　M＝粒径が2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径が0.5㎜未満　　25倍＝実体顕微鏡の倍率が25倍　　実体顕微鏡による観察：L＝粒径が1㎜以上　M＝粒径が1㎜未満0.3㎜以上　S＝粒径が0.3㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　－＝以下の粒径がある　貝＝貝殻状　フ＝フジツボ状　パ＝軽石状　球＝球状　類型区分は奥田の区分(1992)『庄内式土器研究Ⅱ』を参照.



1　大吉備津彦命墓　採集遺物（諸陵寮期）



2　大吉備津彦命墓　採集遺物（平成 20 年度）



1　大吉備津彦命墓　採集遺物（諸陵寮期）



2　大吉備津彦命墓　採集遺物内面（諸陵寮期）



3　大吉備津彦命墓　採集遺物（平成 19 年度）



1　大吉備津彦命墓　採集遺物（平成 20 年度）



2　矢部大坑古墳　採集遺物（諸陵寮期）